

ハンセン氏病に対する偏見や差別はなんと根づかいものであるうか、どんなに迫害を受けていても、どこにも誰にも訴えることはできないのである。家族に一人の発病者が出た時、六親眷族の末縁に至るまで、ハンセン氏病者の血縁という枷をつけられるのである。ゆかりのある人も、いつのまにか遠ざかってゆき、社会的な地位のある人にも、ひそかなるささやきによって傷つけられ摘みとられている。私の聞き知るところでは、三代も前にハンセン氏病者がいたとかで、それを理由に離縁された。という人がいた。兄の発病のために子どもを交えての円満な家庭が一変し離縁されたとも聞く。母親の発病のため家庭内の圧迫に耐えがたく、ついに婚家を去って行方不明になったとも聞いた。

私もかれこれ三十年まえの雪の朝のことであった。長男の俊彦が戸外で、けたたましく泣き叫ぶので、何事かと玄関を開けたとたんに、冷水をかぶせられたように棒立ちになった。雪の中に立っている俊彦を仲良しの貢ちゃん、雪すくいで俊彦をたたきながら、「俊ちゃんは、こんな所に出てはいけんぞ、出るな、帰れ、帰れ」と言っていた。三才になったばかりの俊彦はただ大声で泣き叫ぶばかりであった。貢ちゃんの行為は四才の知恵とは思われなかった。両親の意志を行動にあらわしているのではなかるうか、病の私がいれば幼ない者の心をいじけさせてしまう。ここにはならない。子どもの許にはならない、との思いが脳裏を駆けめぐるのであった。

貢ちゃんは私のいることに気付くと、たたく手をやめ、白い眼をむいて私をじっとにらみつけ帰って行った。

子どもの将来を思い、自分の生きてゆく途を思うとき、わが人生の大きな曲がり角に立っていることを初めて自覚したのであった。

生者必滅会者常離は、人の世の常なのだと、幾度も幾度も自分に言い聞かせて、ようやく心の整理がついたころには涼風が立ち夕闇の中にコオロギが鳴いていた。

子供と別れて、ここに入園した時、私につながる一切のきずなが断ち切れたのである。当時は治療といっても、一週間にただ一本の大風子油注射をうっただけであったが、真昼でも自分の背丈をいっぱいにのばして歩けるのが、せめてもの慰めであった。